

新刊

□梅沢 俊：[新版] 北海道の高山植物. 367 pp. 2009. ¥2,500 + 税. 北海道新聞社. ISBN: 978-4-89453-505-3.

本書の最も際立った特徴は、日本全体の高山植物を扱った図鑑では省略されることの多いもの、あるいは情報不足で掲載を見送られるものをここでは実際に画像として見ることができる点にある。例えば、普通1枚の写真で済まされてしまうエゾキシミレもアポイ岳の他、日高山脈、芦別岳など6枚の写真を用いて変異が紹介されている。写真と解説の双方を自ら担うということが逆にフットワークの俊敏さをもたらすのか、最新の情報も随所に盛り込まれている。「あとがき」には、アップ写真を多用して近縁種との見分け方を示したこと、生育状況が分かる写真を盛り込むことの二点に特に力を入れたとある。とくに後者は本書のもう一つの特徴で、生育状況が風情があっても艶やかな、氏独特の写真で表現されている。

著者の梅沢 俊氏は札幌在住のプロカメラマンで、頑なに北海道のフロラに拘りつつ、これまでに多数の図鑑を世に出してきた。そうした著者の仕事の延長線上で出版された本書は、北海道の高山植物図鑑の決定版といって良いと思う。40年以上の永きに渡って山登りを継続されてきた、著者の岳人としての資質が本書に遺憾なく発揮されているといえよう。本書は同氏ならではの著作だが、ところどころに「予告編」がちりばめられているところを見ると、「現段階での」決定版というべきなのかもしれない。本書がこれまでの同氏の図鑑と異なっているのは、花色による配列を改め、新エングレー方式の配列（分類順の配列）を採用したことだろう。やはり、この配列を採ったことにより、格段に使い易くなったと思う。巻末には和名の索引はあるが、学名の索引がない。アマチュアの植物研究者にとって学名の使用頻度は高くないというのが著者の考えと聞くと、やはり学名の索引がない

とかなり不便である。タイトルからは地域フロラを扱った図鑑の一つのように見えるが、本書は既にそのようなレベルを越えている。内容の濃さと印刷の美しさの故に、我国から出版される各種図鑑類は海外でも注目されている。内外の研究者レベルの要望に応えるためにも、学名の索引は是非とも欲しいところだ。

巻末には佐藤 謙氏（北海学園大学教授）の「生育地とともに高山植物を知る」の一文があり、北海道の高山植物の「生活の場」を知ることができる。佐藤氏は『北海道高山植生誌』（本誌 82 巻 5 号 320 ページ参照）の著者でもある。佐藤氏はこの一文の中で、「北海道の高山は日本の中でも多様な生育地と多様な植物をみることができるところである」と述べられているが、全く同感である。雪田植物の豊富な大雪山や知床連山、超塩基性岩地の植物が顕著な日高山脈や夕張山地など、豊かなフロラに恵まれた山々が北海道にあって幸せに思う。（門田裕一）

□小林良生：海からの紙 222 pp. B5 版. 1993. ¥2,000. ユニ出版株式会社. ISBN: 4-946450-11-4 C1045.

東京・飛鳥山にある紙の博物館へ行ったアンケートを求められたので、書いて出したらこの本をくれた。アンケートの景品にしては高価だが、理由（推定）は末尾に記す。著者は応用化学出身で、工業技術員勤務。陸上植物に含まれる多糖類のセルロースから作る紙に対して、海藻に含まれる多糖類から作る紙について、いろいろな研究成果を紹介している。なんでそういうことにこだわるのかというと、陸上植物からの製紙が環境問題を引き起こしていること、海藻は生育周期が短くて量を得やすいこと、沿岸汚染の対策になり得ること、セルロース紙では得られない種々の機能をもつ紙（機能紙）を作ることができる可能性があることなどだという。ただ、セルロースはもともと繊維として存在しているのに対して、海藻の多糖類は繊維の形をとらない粘質多糖類なので、まず繊維にしてから紙にする

というところに工夫が必要らしい。分子構造にまで立ち入った話があちこちに出てくるが、理解しやすい。アマモも製紙の対象になっているし、マングローブ、エビ・カニ、浅草のりと浅草紙、苔（カワモズク）紙の話題もある。紙やパルプについてちょっとした話題を増やす本である。

第一頁の裾に「本文用紙はすべて海藻紙（ALGA CARTA）（輸入）を使用」と記してあり、それについては80頁の「工業化された海藻パルプ」に見られる。ベネチア湾の富栄養化に伴い異常繁殖した *Ulva rigida* の有効利用の話なのだが、イタリア語からの翻訳のせいか、「アオサは海草で、セルロースの含量が高い」となっていて、ちょっと信じ難い。海藻紙といっても一種の再生紙で、古紙パルプに海藻パルプを混ぜて作るのだから、分析すればセルロースの含量は高いだろう。

とにかくこの本はそういう由来の海藻紙で、ごく淡い黄色味を帯び、淡緑色の微細点をちりばめた、やや厚手の紙でできている。厚さは10枚で1.1 mm、本誌や文庫本の0.9 mmにくらべてゴワゴワした手ざわりである。印刷物としての出来ばえはどうということはないが、問題は製本である。無線綴じのくるみ製本だが、もらった本を開いたトタンに、最初と最後の数枚が外れてしまった。紙の博物館の受け付けにあった見本誌はもっとバラバラだった。どうやら接着剤との相性が悪いらしい。関心ある方は、本屋へ注文するよりは、紙の博物館（入場料300円）を見学してアンケートの見返りにもらう方がよさそうである。

（金井弘夫）

□福井希一，向井康比己，谷口研至 編著：クロモソーム植物染色体研究の方法。251pp. 2006. ¥6,930. 養賢堂. ISBN: 978-4-8425-0380-6.

本書は植物の染色体に関する研究方法について、89名の日本の研究者の詳細な研究方法を集めて、わかりやすく記載したものである。第1編は染色体標本の作製法で、押しつぶし法などの基本操作、分染法、生殖期染色体標本作製法、生物種ごとの特殊な染色体試料の作製方法が記載されている。第2編は分子細胞学的手法で、クローニング法、in situ ハイブリダイゼーション、複製解析法が記載される。第3編は染色体情報の解析と利用について記述されており、染色体情報表記法、フローサイトメトリーなどによる染色体情報解析、画像処理、電子顕微鏡および走査型プローブ顕微鏡について記載される。第4編は染色体操作で、交配による操作、染色体突然変異誘起法、培養による操作、染色体操作・加工法が記載されている。第5編は研究支援情報で、アラビドプシスなどの植物育成法、試葉の調製法、染色体試料、染色体・ゲノムウェブサイトが記載されている。

編者らは、このような植物の染色体研究には研究者が自分で工夫した技術、つまり「こつ」が大切であることを重視し、論文にあまり記載されない研究者独自の技術的貢献を記録し、残すことが重要だと考えてきた。本文中では非常に多くの研究方法が紹介されているが、これらの研究方法は単に手順を記載しているだけではなく、各研究者が重要と考えているポイント、つまり「こつ」が、注として添付されている。植物の染色体を研究する上で、また、染色体の研究だけでなく、全ての研究の「こつ」をつかむために非常に有益な一冊である。後書きにある「本書は我が国の植物染色体研究および関連分野の研究者89名が分担執筆し、作り上げた後代への贈り物である」の言葉が印象深い。（近藤健児）